

＜演題名＞Direct Cleavage や Reverse Cleavage は Day3 での胚選択において有効な指標となり得るか？

＜発表者名＞村重 紘志¹ 稲場 美乃¹ 中西 麻実¹ 水野 里志¹ 井田 守¹
福田 愛作¹ 森本 義晴²

¹ IVF 大阪クリニック、² HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】移植胚の選択には従来形態学的評価や発育速度が用いられていた。近年、タイムラプス（ES）の導入により培養環境を維持して胚の連続観察が可能となり、新たな胚評価法が導入されつつあり、Direct Cleavage（DC）や Reverse Cleavage（RC）は、負の指標の 1 つである。しかし、従来評価により、結果として DC や RC 胚が移植の対象から除かれているならば、必ずしもこれらを観察する必要はないと思われる。このため、Day3 胚選択において、DC および RC が有効な指標になり得るか検証した。【方法】2013 年 6 月から 2016 年 12 月までに ICSI 症例で複数の分割胚が得られ、ES による Day3 までの観察培養を行った 84 症例 91 周期の移植可能胚 241 個を対象とし以下の検討を後方視的に行った。従来の形態学的及び発育速度による胚評価法（従来法）と、DC と RC を加味した評価法（DR 法）の 2 法により対象胚全てを評価した。それぞれの評価法で各周期の最良好胚を決定し、2 つの評価法で最良好胚が異なる周期の割合を算出した。次に、DC のみ（D+）、RC のみ（R+）、DC と RC 両方が観察された胚（DR+）、及びどちらも認めなかった胚（DR-）を移植した場合の生産率を比較した。なお、DR 法では従来法の優先順位の中で DC、RC、あるいはその両方を認めた胚を最下位に位置づけた。【結果】従来法と DR 法で最良好胚が異なった周期の割合は 15.4%（14/91）であった。D+、R+、DR+ および DR- 胚を移植した場合の生産率は、それぞれ 100%（1/1）、20.0%（1/5）、33.3%（1/3）、18.2%（4/22）で、D+、R+、DR+ 胚からでも健児が得られた。【考察】DR を胚評価の指標とすることで、従来法で選択された最良好胚が変更になる症例の割合は約 15% であり、従来の評価でも大部分の DC や RC 胚を移植胚の候補から除外できることが示された。さらに、D+、R+、あるいは DR+ 胚を移植した場合でも健児が得られていることから、DC と RC 評価だけでは、Day3 良好胚選別の有用な指標となりえないと考えられた。